

第一章 放課後の教室にはぼっちなサキュバスが棲んでいる

窓から差し込む日差し。騒がしく感じるほどの外の活気。耳元で鳴り響く、眠りを妨げる音。朝を告げる数々の要素に、徐々に意識が覚醒してくる。

いつもの月曜日。この日は、どうしても憂鬱になる。酷いときは、動く気さえ起きなくて……今日はそういう気分だ。

欠席が重なると単位がもらえない。週明けの授業は楽だったよな。授業内容を聞く人がいないせいで、休んだらついていけない。

学校に行く理由をなんとか絞りだし、ふらふらとした足取りで、ベッドを後にする。階段を降りると、当たり前のように朝食が並んでいた。

ホクホクに炊かれた白米。湯気を立てていて温かさが伝わる味噌汁。新鮮な野菜で彩られたサラダ。海の恵みである鮭。元気な乳牛から搾られた栄養満点のミルク。最高の品揃えに、眠気は一気に吹き飛んだ。

母に感謝しながらも、必要なエネルギーを補充していく。箸は止まることなく動き続け、遅くなる気配もない。

充実した学校生活を送るには、この時間は大切だ。数秒で栄養を摂取できるゼリー飲料が売られているのは知っているが、頭を目覚めさせるためにもしっかりと食べなければ。

それが終われば、歯磨き、着替え、気象情報の確認。朝のルーティーンワークをこなす。

そして――

「行ってきます！」

玄関を出るときは、いつもの挨拶を忘れない。

もちろん、お馴染みの言葉が返ってくる。その声に元気をもらい、自宅を後にした。

小さな電車に詰め込まれ、目的地まで運ばれていく。そこは、スマホを取り出す余裕もないほど窮屈な世界。

降りるときに口喧嘩が始まつたが、それもよくあること。ふくよかな女性が、冴えないサラリーマンに暴言を吐いている。

あんなに混雑していたら、ぶつかって当然だろ。偶然手が当たることだつてある。それなのに、あんなことを言われて……運がなかつたというしかほかはない。そして、被害にあわなくてよかつたと安心するばかり。

次は徒步。同じ服を着た人たちが同じ方向に向かつて、黙々と歩いている。それに倣つて、同じように歩く。

複数になつて話している人も中にはいるが、僕たちよりもペースが遅く、無自覚の内に広がつてている。交通の邪魔になつていることなんて、まったく気にしていないようだ。

彼らの話題は決まつていて、昨日のテレビ番組や芸能人関連、ソシャゲ——特にガチャの結果。基本的にこの三パターンだ。会話内容は、ヤバイを筆頭に、マジやウケル、ワカルのコンボ。到底真似できそうにない。

しばらくの間歩き続ける。時間にして數十分。たつたそれだけなのに、スタミナのなさと夏特有の強い日差しのせいで、疲れが見えてくる。慣れた道だというのに、へとへとになる自分が情けない。

予鈴直前に校門をくぐりながら、靴を履き替え三年生の教室が並ぶ四階へと向かうイメージを立てる。何百という数やつてきたこともあって、ロボットのように無駄のない動きになると思っていた。

だが、その通りにはならなかつた。いつもの下駄箱に、手紙が置かれていたせいだ。手紙というと、ラブレターを想像してしまふ。でも、本当にそうなのだろうか。ラブレターを渡す文化は廃れているらしいし、ハートマークのシールはどこにも見当たらない。すべて白色で、事務的な雰囲気を漂わせている。

宛先は……うん、僕の名前だ。入れる場所を間違えたなんてドジでもなさそう。軽い気持ちで裏返す。差出人が記載されていたが、目を疑うものだつた。

サキュバスより――

「へえ？ なんで……？」

その名を見た途端、心拍数が急激に上昇し、みつともなさすぎる上擦った声まで出し

てしまう。幸いなことに周りには誰もおらず、冷たい視線を向けられることはなかつた。

さつきのは錯覚。そう信じて、もう一度……。

サキュバスより――

相も変わらず『サキュバス』の文字が浮かんでいた。サキュバス、それは男性を淫らな夢に誘う女性の悪魔。様々な伝承が残っているが、それはひとまず置いておいて、彼女はエッチなコンテンツに頻繁に登場している。

サキュの宮先生のようなサキュバスをメインに描いている方もいるぐらいで、僕も昨日サキュバスものの小説を投稿したばかりだ。

そんな単語を学校で目にすることは思っておらず、落ち着く気配のない頭と震えが止まらない手で、本文を読んでいく。

『放課後、教室で待っていてほしい』

たったこれだけの内容なのに、なかなか飲み込めずにいる。なんで待っていてほしいのか。自分の教室を指しているのか。出会ったたらどうなるのか。そもそも、本物のサキュバスからなのか。

数々の「なぜ?」が浮かび、氷解できないまま増え続け、思考回路がショートしそう。ひとまず、手紙をカバンに入れ、サキュバスに心を奪われた状態で歩き始める。

予想外の出来事に時間を取られたが、なんとか本鈴前に席に座れた。

怪奇現象に遭遇したときの心臓のまま、ひたすら考える。

目立ったことは何一つしていないはずだ。悪いことだつてしていない。強いて言えば、みんなに好印象を与えるために、仮面を被つて学校生活を送つていただけ。

男友達がいなければ、当然女子との接点もない。雑用を頼まれれば、決まりきった言葉で答える。ただそれだけの関係だった。

そんな僕に、ピンポイントであんなものが来るなんて……。

あれか、未経験なのが原因か。この年頃だと、みんなカラオケ店とかでセックスしてるんだろう。この前だって、あいつとヤッたんだよみたいな会話が聞こえてきたし。保

健体育で、女生徒を孕ませた男子の体験談を聴いたばかりだ。

そういうえば、女性を知らない男の味は、とても美味しいらしい。エロ漫画の情報だけ。

性欲旺盛の思春期童貞という、サキュバスが一番好む体質だから選ばれたのか。それなら納得できる。

夕日で朱く染まり始める教室に、突如として現れる淫魔。そして、彼女の性奴隸に、もしくは人外のテクニックで命そのものを搾り取られ……ブンブンと頭を振る。どんな理由で誰が送ってきたのかは、もうじきわかることだ。エッチなコンテンツのような展開を想像することはやめにしよう。

掃除時間も終わり、まばらな教室。

そんな中、机で本を読むふりをして過ごしている。文章を追わず手紙のことを考え、ページをめくると同時に室内を確認する。

友達を待っている人や日直が、まだ残っていた。そんな彼らも、時計の針が進むに

つれて帰っていく。

そして——一人の女の子だけが残った。

このクラスになつて半年は経つているというのに、名前がわからない。それどころか、クラスメイトだつたかなと思つてしまふほどで。

彼女も読書中で、僕と違い相応しい姿だ。その様子に心を引かれ、もつと観察してみたい衝動に駆られる。

真っ先に抱いた印象が、周りと比べて地味だということ。目立ちたくないということ。オーラが全身から溢れているせいで、そう感じてしまう。

どんな色にも染まらない漆黒で、耳を隠した首元までの髪。赤ぶちメガネ。控えめな胸。地味属性に拍車をかける女性ペーツばかりだつた。

服装は、当然の如くみんなと同じ夏服。白を基調とした制服から、折れてしまいそうに細い腕が飛び出している。スカートからは、容姿に似合わないむつちりとした太ももが伸びている。

わかりやすく表現するならば、ライトノベルに登場しそうな文学少女——二次元美少女のようだつた。

その姿に見惚れていると、目があつてしまふ。メガネの奥にある小さな瞳に、じつと見つめられる。僕の眼も彼女を映す。

だが、それもほんの一瞬。いつもの癖で、すぐに視界から外す。目を見るなんて、恐ろしくてできるわけない。

そう思つてはいるはずなのに、彼女の美しさに頭を支配され、もう一度見たいと望んでしまう。

また目と目が合つた。どうやら、見続けていたらしい。

そして、なぜか手招きをしている。ここは外国ではあるまいし、このジエスチャーはこつちに来いと考えるのが一般的だ。

僕を呼んでいる。行かないと、失礼になつてしまふ。悪い印象を与える行動は、ここで生活するうえでないと決めているんだ。

怪しみながら、彼女の机に足を運ぶ。

「キミに手伝つてほしいことがあつて……」

「て、手伝つて……？」

知らない人からのお願いに困惑し、無意識に復唱してしまう。

「そう。これを手伝ってほしいの」

一枚の紙を取り出しながら、そう口にした。これってたしか、学級通信に載せる文章の下書きだったかな。よく見ると、『咲ノ宮瑠瀬』と記されていた。

「咲ノ宮さん？ でいいかな？ どうして僕に？」

「文章書くの慣れてるでしょ。前の体育祭の意気込みでそう思って……」
前半部分で一瞬慌てたが、前回書いたものだつたらしい。

「ありがとう……」

些細なことでも、感謝を忘れない。それが、好印象を得るスキルだ。

「こちらこそ、面白いものを読ませてもらつたわ。学校に情がない感じなのに、いいものを書く……あつ、ごめんなさい」

学校という世界を全力で楽しんでいいのは確かだが、実際に言われるとカチンと来る。内容を褒めてくれて、失言も謝つてくれたし、帳消しにしてあげてもいいけど。「それで……手伝ってほしいってわけ？」

「ええ……」

断れば、嫌な気持ちにさせるのはわかっている。でも、面倒そうだしなあ。

「ダメかしら？」

声の調子を変え、上目遣いで求められる。経験したことのない感情に襲われ、頭がクラッとしてしまい……気が付いたら二つ返事で承諾していた。

「助かるわ。その……夏休みどうしたいかつてものなんだけど……」
何ともありきたりなものだ。そうは言つても最後の夏休み。過敏になるのも仕方ない。

「えっと、咲ノ宮さんはどんなことするか決めてるの？」

「コ……これといってないわ。したいことするだけだし……」

「うーん、もつとこう……受験勉強とか友達と遊ぶとか、学校らしい感じがいいんじや

ない？　あと、最後のなんとかみたいな……」

「内定はもらってるし、友達はいなくて……」

「うそ！？　もうもらってるの！？　どこ？」

「そ、その……美術の専門……」

「絵描けるの！　見せて！」

「いや……それはちょっと……これをやらなきやだし」

たどたどしい口調で、課題を促される。

「そうだったね、ごめん、ほんとごめん」

喋ったことがなかつたのに、いきなりこんな話をするんじゃなかつた。親しくない相手の領域に踏み込んでしまえば、またおかしな人扱いされてしまう。そんなことより、受験はなくて友達とも遊んだこともない。それだったら、材料に困るのも納得できる。

「友達がいないだつて？」

同類がいて、心が安らぐ。彼女もぼつちだつたのか。

「なんでそんな顔してるの？」

今のは気持ちが表情に現れていたのか、刺々しい言葉が発せられた。これは、絶対不快にさせたんじや。嘘をついてもすぐバレそだし、正直に謝ろう。

「ごめん。友達いないの同じだなつて……」

「うつ——学校にいないだけだから！」

ネットにいっぱいいる。ゲームで会える。頭の中にいる。そのパターンのやつだ。ちなみに、僕もネットには数人いる。そういう点でも一緒つてことか。

「大丈夫。僕だってそうだし……つと、さつさとやつていこ」

「そうね。どんなのがいいかわかつた?」

「えつと……学校が気に入るような内容でいいんじゃない?」

「と/or うと?」

「学校生活を楽しんでいる人たちに、視点を合わせる感じ?」

なぜか疑問系で答えてしまった。決まりきった対応ができない会話ほど、難しいものはない。もうダメだ。あのときこう言えばよかつたと後悔するのが、容易に想像で

きる。ベッドの上で今日のことを思い出して、転げまわるに違いない。僕たちの経験や気持ちで書かれたものなんて、誰も望んでいない。だから、リア充

になりきつてみるべき。こういうことを伝えたかったのに。

「う、うん……何となくわかつたわ」

理解してくれたようで、一安心。

書き始めている咲ノ宮さんを、じつと見守る。

脳内で構成を練っているのか、ペンを動かす速度が遅い。それでも確実に……少し
ずつ……遅筆ながらも進めている。

見た目通りの綺麗な文字が、浮かんでは消えていく。
言葉選びに困つたり筆が止まつたりしたら、ない知恵を絞つてアイディアを出して

「終わった……」

六百字詰め原稿用紙に、咲ノ宮さんの言葉がぎっしり敷き詰められる。偽りの気持ちだとしても、必死に考えた文章だ。その達成感は、相当なものではないだろうか。

「助かったわ。ありがとう」

「いや、僕は何も……ほとんど咲ノ宮さんがやつてたし……」

「キミの力がなかつたらできなかつた」

軽いお礼なら両手で数えられるほどはあつたが、こんな感謝のされ方は初めてで、ついつい胸が温かくなってしまう。

「おかげで良いものになつたわね。……もしかして小説とか書いたことある?」

突然の質問に、動搖を隠しきれない。

あると答えるのが適切だ。けれども、自分の欲望を具現化しただけのエッチな小説で……。しかも、女性上位ものの。

こんなことを知られたら、ただでは済まされない。学校生活終了、いや、社会の学校化が進んでいる今、人生までが終了する恐れがある。

「いや、それは……ない、かな」

怪しい感じになってしまったけど、なんとか否定できた。これで大丈夫かな。

「それは惜しいわね。やってみるといいんじゃない？」感想たくさんもらえそうだし」
その言葉には説得力がある。咲ノ宮さんに前回の学級通信を褒めてもらつたし、作品を投稿すれば、いつも細川さんからコメントをもらえていた。昨日は、尊敬しているサキュの宮先生からもいただけた。

「ありがとう。ちょっと考えてみるよ」

素直にお礼を述べ、ここで話は終わつた……と思ったのだが、咲ノ宮さんの瞳は何かを訴えかけているように鋭く輝いていて、その口から新たな話題が発せられた。

「ところで、ツブヤイターフてやつてる？」

「いきなりどうしたの！？」

転換が急すぎて焦りを隠せない。それに話題が話題だ。焦るに決まつていて。どうしてそのツールが出てくるんだ。

「やつてたらでいいの。教えてくれない？」

「面白そうじやなかつたからやつてないんだ。誘つてくれる友達もいなかつたし。今からやつていいのかなあ……」

今度はしつかり誤魔化せた。

住居が知られたら困るのと同じで、アカウントがバレたら困る。それはもう大変困る。周りと使い方が違うことも相まって、なおさら知られたくない。

随分昔に、名前を覚えているクラスメイトをツブヤイターで検索したことがある。すると、アカウント名が本名。プロフィール画像が自撮り。部活仲間らしき人と写った写真の眩き。そして、学校名とクラスが自己紹介文に記されていた。この学校に所属している者です、仲間ですよと主張する使い方だ。

そうしていない僕は、誤魔化さなければ人生が危ない。

一時しのぎの嘘を言い終わって安心していると、女の子らしいケースのスマホを突き付けられた。

「これ、キミのだと思つたんだけど……違う？」

頭がフリーズする——

その画面に映っているのは、誰よりも目にしたことがあるプロフィール。そう、僕のアカウント『初芽七草』だった。

これって、ネットでたびたび話題に上げられている身バレってやつ？ 清楚な雰囲気を漂わせている咲ノ宮さんに？ もしかしたらクラス全員、下手をしたら学校中にバレていることだって考えられる。

身バレに繋がる呟きは、何一つしていなのはずなのに……どうして？ これってダメなんじや？ 学校生活——いや、人生終了？

あまりの驚きと恐怖に、世界全体の時間が止まる。しかし、それはただの錯覚で、無音の教室に時計の音だけが響いている。

「な、なんで……？」

数秒？ それとも数十秒？ どれぐらい経った後なのかわからないが、ひとりごとのように発した。それは、勝手に口から出たものだ。思考する機能が、疑問で埋め尽くされてまったく働かなかつた。

「もう少し別の言い方があつたんじやない？ 誰それとか……。なんでって言葉、肯定してるようなものよ」

容赦ないがその通りだ。「どうして僕のアカウントを知っているんですか?」という意味にも置き換えられる。要するに、これが自分のアカウントだと認めてしまったことになる。

「え? いや……それは……その……」

彼女の瞳には確信めいたものが宿っていて、否定しようにも否定できず、誤魔化すことすらできない。

心が押しつぶされて、もう耐えられない。この場から逃げてしまえば……明日が怖くて学校に行けなくなる。

できることといえば、もうこれしかない――

「僕のです……それ僕のです! なんで知ったのか知らないけど、絶対……絶対他の人に言わないでください! お願ひします! 何でもしますから! それがバレたら……」
冷たくなった床に頭を擦り付け、必死の懇願。どんな酷いことをされてもいいという覚悟で、恥辱にまみれた土下座をする。同級生ではなく、奴隸と女王様のようだつた。
「ん? 今何でもするって言つたわね。じゃあ……顔上げて。私が悪いことしてるみたいじゃない」

だが、屈辱的なことは何一つされなかつた。それどころか、慈愛に満ちた言葉を発した。

意図が読めず、いまだに平静を取り戻せない。

「……ほら、ここに座つて。……ね」

受け入れないと話が始まらない雰囲気で、困惑状態のまま誰かの椅子に腰を下ろす。『その……キミの文章と七草先生の書き方が似てる気がして……。別にいやらしいことなんかしないし、他の人にも言わない。あと……こんなことして本当にごめんなさい……』

僕の学級通信と、初芽七草の小説が似ていたから確認したかつただけらしい。どこで判断したのかはわからぬけど。

『バラされたくなかったら、私の命令に従つてもらうわよ』という、エッチなコンテンツによくある、身バレして人生詰んでしまう展開じやなかつたのか。助かつた……。待てよ。さつきの言葉に、ひつかかるものがある。

初芽七草の書き方と似てゐる気がした。そう言つていたよな。ということは、清らかなオーラを纏つてゐる咲ノ宮さんが、淫らな欲望を垂れ流しただけの小説を読んだ

ことになつて……。

「あの……咲ノ宮さん？」

「どうしたの？」

「僕の……その……あれを読んだの？」

「そうだけど……昨日話したでしょ」

「昨日！？」

おかしい。家族とファミレスで食べただけで、ずっと家に引きこもつていたのに。

「ツブヤイターのリプレイ、覚えてない？」

「え……えええッ——！？」

リプレイ。その単語に酷く驚く。

昨日は、細川さんとあのサキュの宮先生としか話していない。細川さんが学生のはずがないから、消去法から必然的にそうなる。

「サ、サキュの宮先生！？」

「ようやく気づいてくれたみたいね」

「そ、そんな……」

同じクラスの咲ノ宮さんが、いつもお世話をなっているサキュの宮先生……だと……。確かに、どことなく名前が似ているような。

そうだとしても、男を射精させるためだけのイラストを描いているなんて、にわかに信じがたい。美術の専門学校に行くらしいし、写生自体は慣れていると思うけど。

「まだ信じない？ だつたら……」

ノートを取りだし、白紙のページにペンを走らせていく。その動きは卓越していて、軽快なリズムが生まれている。

現状をまったく理解できていない僕は、その行動を黙つて見続けるしかなかつた。

次第に女の子の輪郭が浮かび上がつてくる。しばらくすると、見覚えのあるものになつていき……というか、昨夜使つたばかりものだつた。

「ふう……アナログは久々だつたけど、これでわかつたかしら？」

咲ノ宮さんが、サキュの宮先生のイラストを描く場面を目撃してしまつた。見てしまつたからには、もう信じるしかなくて。

情けない顔をしているだろうけど、そんなことに構つていられない。この事実を脳に教え込ませようと必死になる。

「信じてくれたみたいね。さつきからそうだつて言つてたのに……」

「ちよつと待つてよ！ こつちはわけがわからないんだけど。なんで僕なんかにバラしたの？」

自ら正体を晒すのは危険すぎる。公にしにくいものなんだから、なおさらだ。

「同業者だし、信頼できそだつたから。ただそれだけよ」

「……う、うん、わかった。ありがとう」

信頼できそうと思われていて、自然と感謝の言葉が漏れる。常日頃から、好印象を与える仮面を被つていた甲斐があつた。

そんなことより、同業者と認められると、なんだかむず痒い。僕なんか先生の足下にも及ばないのに。

「それで……話は変わるけど……と、友達になつてほしいの！ 趣味が合いそうだし……キミともつと話したいし……」

「えつと……こちらこそお願いします！」

断れるわけがなかつた。

トラウマのせいで好きなことを隠していた僕にも問題があるのだが、今まで趣味を

共有できる人に出会えなかつた。みんなの輪に入るためだけに、趣味を合わせていくことはしたくないし、さらけ出したらいじめの対象になる。そのせいで、友達がまったくできなかつたのだ。

趣味の合う人が見つかれば、一等の宝くじが落ちていたときのよう、食いついてしまうに決まつてゐる。

「……ありがとう。これからよろしくね」

目をそらさずに、相手の顔を見続ける。自分でも驚くほど、じつと見つめることができた。

咲ノ宮さんは、美しさと可愛らしさが混ざつた笑顔を作つてゐた。きっと、僕も素晴らしい表情をしているに違ひない。

「さつそくで悪いけど、七草先生のサインをもらえないかしら？ こういうのは持つておきたいもので……」

「なに？ サインって、芸能人とかがよくするあれ？ それ相応の色紙を渡そつとしているし、本当に書かせるつもりらしい。

「無理だつて。有名じやないし、考えたこともないんだから」

「ダメ？ だつたら、また今度お願ひできる？」

「うん……いつかね。それよりも、サキュの宮先生のは？ あ、いや、よかつたらでいいんだけど」

「私？ いいけど……ちょっと待つてて……」

「ユツシユと素早い動きで、ペンが音を奏でる。

「……大切にしてね」

同人サークル『サキュバスパレス』、サキュの宮先生のサインを受け取った。文字が記されているだけなのに、なんという神々しさだ。

「ありがとう。しつかり保管しておくから」

「七草先生のも楽しみにしてるわ」

「うう……」

尊敬している先生からサインを頼まれるなんて。早い内に決めておかないと。

それでも、先生呼びはいつまで続くんだ。恥ずかしいというか、くすぐつたいというか。

「その……先生っていうのやめてほしいんだけど……」

「呼び捨てなんてできないわよ。一つでも作品を残している人は先生でしょ」

作家先生を呼び捨てにはできない。その意見には賛同できる。

彼らはコンテンツを生み出すだけの機械ではなく、実際に存在しているのだ。それを忘れないためにも、必ず敬称を付けている。

「そういう考えもわかるけど……僕も、サキュの宮先生って言つてるし。でも、ちょっとあれで……」

「それじゃあ……七草さんでいいかしら？ 私のこともそう呼んで構わないから」

「わかった。サキュの宮さん、かあ……」

なんだか距離が縮まつた気がした。この言い方は、ネットの世界だけつてのはわかっているが。

リアルの友人関係を築いた僕を祝福するかのように、チャイムが鳴り響いた。それからしばらくすると、下校時刻十分前の放送が流れ始める。

時計を見ると、もう六時前。夏ということもあり、そこまで暗くはないが、遅いことには変わりはない。いつもならば、早々に帰宅して、自分の部屋に引きこもつている。

それなのに、まだ教室に残っている。しかも、咲ノ宮さんと二人きりで。なんて甘美なんだ。成年向けコンテンツだと、エッチな展開になりそう。

放課後の短い時間で、濃い経験をしたなあ。クラスメイトに身バレした。そのクラスマイトが、あのサキュの宮先生だった。そして、友達になることが出来た。ラノベ風のタイトルにすると、『クラスメイト（エロ同人作家）に身バレして人生詰むと思つたら友達になれました』みたいな感じになるのかな。

とにかく、今日学校に行つて本当に良かつた。

でも――

「夢じやないよな？」

現実離れしたイベントが続けざまに起ると、誰だつてそう思う。

「だつたら、現実じや絶対にできない気持ちいいことしてみる？」

「それって……」

「キミは何もしなくていいから。私に任せれば、すぐに天国を見せてあげる。普通じや体験できない最高の快楽。それを徹底的に味わつてみたいでしょ？ 首を縦に振るだけでいいの。そうしたら、満足するまでしてあげる」

淫らな妄想をしてしまう言い方——淫魔にでも取り憑かれたような、妙に芝居がかつた台詞だった。

豹変に戸惑いを隠しきれない。

「悩むことなんてないじやない。お互に得のあること。頷くだけで、二人とも幸せになれる。だから……ね」

赤く艶やかな唇がゆっくりと動き、頭をおかしくさせる言葉が、次々と耳に入つてくる。それは、オスの情欲を搔き立てるエッチな言霊だった。

温かい吐息が顔にかかる。それほどまでに近い距離。

小さな瞳が、視界いっぱいに映る。

僕たちがいるのは、蠱惑的な雰囲気を醸しだしている放課後の教室。そこは、男女の愉悦を描いた物語には欠かせない場所。欲望に支配された人間が、こぞつて求める世界。

今からどんなことが行われるのか、性に飢えた思春期男子には容易に想像がつく。すべての脳内メモリが桃色に染まり、その行為が勝手に再生される。停止なんてできるはずがない。いくつもの映像が、ずっと頭の中で流れている。

そして——体中の血液が急激に沸き立ち、いたるところが熱を持ち出す。

もう耐えきれない。太陽に照らされたアスファルトの水のよう、脆い理性は一瞬で溶けてしまった。

とうとう首肯してしまう。抗えなかつた。性欲に勝てるわけがなかつたのだ。

「ふふつ……冗談よ。こんな簡単に堕ちてくれるとは思わなかつたわ。そんなにしたかったの？ 気持ちいいこと？」

腰が碎ける。みるみる緊張が解けて、とにかく体に力が入らない。

「別に……そういうことなんか……」

快樂を望んでいたのに、誘惑を振り切つたふりをする。負けを認めたくない。

「本当かしら？ まあ、悪戯もほどほどにして……さつさと帰るわよ。下校時刻過ぎちゃうし」

心ここにあらずといった状態で、下校準備をしている様子を眺める。

さつきの彼女は、男を魅了することに長けている淫魔のよう、その瞬間、あることを思い出した。もしかするとあれは——

「咲ノ宮さん、これつて……」

カバンにしまっていた、サキュバスからの手紙を差し出した。

「察しの通り、私が書いたものよ」

「やつぱり……」

「これも悪戯だったというわけか。『サキュバスより』なんて、驚くに決まっているだろ。

「よく僕の下駄箱がわかつたね」

「名簿を見て番号を覚えてたのよ。それよりも、本物のサキュバスだと思つた？　出会つたらどんなことされるんだろうとか考えてた？」

「弱みを握った子どものように、からかつてくる。

「くッ——それは……あつ、もう時間ないじやん！」
誤魔化すことしかできなかつた。

「ふふつ……そうね」

「元に手を当てながら笑われる。それにつられて、なぜか笑顔になつてしまふ。この年になつて、友達がいることの良さを実感した。

その場の流れで、一緒に校門をくぐり帰っている。記憶にある限り、二人での下校は人生初だ。

無言だと気まずいし、何か話した方がいいんだよな。天気をネタにすればいいと聞くけど、「夕日がきれいだね」「そうだね」こんな感じで終わるだろ。会話のラリーなんてあつたものじやない。そもそも、天気に詳しくなりすぎると、気象予報士みたいで気持ち悪いじやないか。

どちらも黙つたまま、ひたすら歩き続けている。

一言も喋らないまま別れると思つていたところ、咲ノ宮さんが話しかけてきた。

「その……今日のことは、私たちだけの秘密にしてほしいの。住む世界が違う人に知られるのは嫌だし……」

発言に少し引っかかつたが、言いたいことは十分わかる。普通じやないとかおかしいって馬鹿にするのが、あいつらの特徴なのだから。身をもつて体験したし、絶対そうだ。

記憶を遡つていたせいで、思い出したくもないワンシーンが次々よみがえつってきた

——好きなことを好きなようにやつていただけなのに、おかしな人扱いされて……。つい拳を強く握ってしまう。彼らを許してやるつもりはない。

「そんなのわかつてるって。バレたらどうなるか予想付くし……。ってか、話す人いないし。だから安心して」

「ありがとう」

感謝の言葉を耳にして、再び沈黙が訪れる。数分経つてもそのままで……。この空気を打ち破ったのは、またしても咲ノ宮さんだつた。

「そうそう、一回目ラストの『もう我慢できないの?』ってセリフ、『もう我慢でくないの?』になつてたわよ」

「えつと……うん、わかつた……ありがとう。帰つたら見てみるよ」
内容を理解するのに、数秒費やしてしまつた。

誤字脱字があると、萎えてしまう。エツチシーンならなおさらだ。反省しなければ。さすがサキュの宮さん。指摘できるほど読み込んでくれているなんて、僕の何倍もしつかりしている。

「そういうのに気付くぐらい読んでくれてたんだね。その……えつと……どうだった?」

「昨日言つた通りすごく氣に入つたわよ。スク水爆乳口リサキュバスを描きたくなつたほどにね」

直に感想をもらえて、心が満たされる。それに、作品制作に刺激を与えていたらしく、嬉しさ爆盛りだ。もしかしたら、理想とするサキュバスを描いてくれるかも。

「私の新作も良かつたんでしょ。あれだけ褒めてくれたんだから、いわなくともわかるわ」

「あ、あああ——！」

穴に潜つて、もう一生出たくない。冷や汗がブワッと吹き出し、この場から消えてしまいたいほどの恥ずかしさに襲われる。

サキュの宮さんにおシコリ報告をしていたのだ。それも、どのシーンがどういう風にエロかったのか具体的に。

男性の作家先生だと思つて話しかけていたが、本人は女性——それも、クラスメイトだったわけで……。クラスの女子に、「その大きいおっぱいで、いつもエッチなこと妄想しているよ」と暴露するのと変わらないのでは。

「どうしたの？ そんなに慌てて？」

「……昨日のセクハラ発言ごめん。気持ち悪かったよね……」

罪悪感を抱いたまま謝る。

「うん？ なに？ ……ああ、そのことね。別に気持ち悪いなんて思ってないから。むしろ嬉しいぐらいだし」

「う、嬉しい……？」

「私の絵で興奮してくれて、実際に使ってくれた。だから嬉しい。キミも、小説を褒められたら嬉しいでしょ？」

「それは……うん。けど、恥ずかしくないの？ だって、男の人のそういう……なんか……」

「そんなわけないでしょ！」

どんな内容でも、頑張って創ったんだ。恥ずかしいわけがない。そう言われているようだった。

僕はどうだ？

羞恥心を消せず、自信も持てていない気がする。いつかは、咲ノ宮さんのように胸を張れる日が来るのだろうか。

「男性作家だから女性作家だから……そんな考えは捨てなさい。同じ趣味を持つ者に、

性別の差なんて関係ないわ。あと、作品に触れるときは、作者のことを考えるのもダメ。女性作家先生は全員いやらしいとか思っちゃダメだから。わかった？」

「……わかった」

強く叱責される。もつともなことだった。僕が間違っていたと反省する。

この話を聴き、女性と公言している作家先生が頭に浮かんだ。彼女も、咲ノ宮さんと同じ気持ちで、活動しているに違いない。

残念なことに、ここで会話が終わってしまった。

咲ノ宮さんも電車通学だつたらしく、二人で乗車することになった。少ない人数とはいえ、私語は慎むべき。

隣に目を遣ると、スマホを使っていた。周りも、当然のごとくスマホに夢中。僕もそれに倣うことにした。

電源を点けて、すぐにツブライターを起動する。お預けにされ続けていた、極上のサーロインステーキを食べていいと言われたときのような早さで。

いくつかの通知と、ダイレクトメッセージが一通届いていた。

誰から？ そう思いながら、メッセージ画面を開く。

サキュの宮さんからだ。

『これからよろしくね』

その文章を送った咲ノ宮さんは、満面の笑みを見せていた。お返しに、笑顔と一緒に返信する。

『こちらこそ。これからもお世話になります』

『それはどっちかしら』

お世話になります——これには、二つの意味があつたんだ。友達として、これからも咲ノ宮さんと仲良くしていく。そして、サキュの宮さんの作品を今後も使わせていただく。

返事に困った結果。

『両方だよ。咲ノ宮さんと楽しく話したいし、サキュの宮さんのイラストもずっと使わせてもらうから』

先ほどの言葉から、感想はしっかりと伝えていった方が良い気がした。

「ふふつ……」

温かみのある顔で、軽く吹き出した。周りの目が怖くなつたのか、すぐさま辺りを確認している。

その様子が可愛くて、ついつい和んでしまう。

彼女が落ち着きを取り戻してから数秒後、一枚のイラストが送られてきた。それは、サキュバス特製の尻尾ホールに、何もかも吸われ尽くされようとしている男性——ツブヤイターで好きといった、サキュの宮さん渾身のエッチイラストだった。

腰に力が入らないほど射精させられてしまつて、淫魔の爆乳に支えられるようにしてなんとか立つてゐる。ところに蕩けきつた表情をしていて、快樂で口が開きっぱなし。そこから涎まで垂れている。人前でしてはいけない、みつともなさ過ぎる状態だ。対するサキュバスは、面白いおもちゃで遊んでいるようだつた。力関係がはつきりしていて、サキュバスの強さも表れている。

脳内から消せないほど見たものとはいえ、实物の破壊力はすさまじく、その妖艶なイラストに目が釘付けになつてしまふ。体が満足するまで眺めていたい。

いや、このままだと人生が危ない。電車内で淫らな気持ちが増幅したら、社会的に駄目になる。それに気付いて、慌ててスマホの電源を切る。

イラストを送ってきた同人作家に視線を移すと、容姿からは想像もできない、ニタアとした妖しい笑みを浮かべていた。まるで、男を手玉に取る女の子様、もしくはオスで愉しむ女王様のようだつた。

「くすくす……」

ゾクゾクとした震えが全身を伝う。山椒魚に出会ってしまった蛙。猫に見つかったネズミ。そして、サキュバスに敗北した男勇者。それが今の僕だつた。

下校前の誘惑とさつきの表情で思い知らされた——咲ノ宮瑠瀬という少女には逆らえない。

それからは、お互いスマホに夢中になつて……特に変わつたことも起こらなかつた。視界の端の咲ノ宮さんが、何やらゴソゴソと動いている。もうすぐ目的地に着くんだろう。

下車時に手を振つてくれた。もちろん、すかさず振り返した。こういうところは素直に可愛いんだから。そのせいで、さつきの表情がよけいに恐ろしい。

さてと、僕もそろそろ降りる準備をしようか。

玄関を踏むと同時に、母が心配してやつてきた。下校時刻になると、帰宅部のエースよろしく速攻で帰つていたからなあ。

「友達と遊んでただけだから」

詳しく話すのも面倒だし、簡潔にそう告げる。なんで、喜びと驚きが混ざった声をあげるんだよ。息子に対してもそれは酷いだろ。

自室にこもつて、パソコンを点けてすぐツブヤイターを開く。この流れは、もう日課になつていてる。

そういうえば、通知を見るのを忘れていたな。

やつぱり、細川さんからの返信だったのか。

『サキュバスの素晴らしさは尻尾なり。あれに搾り尽されたいでござる。先日までそう思つていた小生だが、最近になつてサキュバス尻尾に掘られる良さにも気づき始めて……わかってくれるか、七草氏よ』

以前したサキュバス談話の続きらしい。

『サキュバスの尻尾はいいですよね。クhaarと開いて咥え込まれるのが最高です。そ

の前にえげつない構造を見せつけられたり。でも、掘られるのはちょっと……』

『まつたく……彼との会話は癖になる。それに元気をもらえる。持つべきものは、好きなことを好きなだけ話し合える友達だな。』

『初めは誰だつてそう言うんだけど、すぐにハマるはず。サキュバスにハメられるのに。ふふつ、小生渾身のギャグの切れ味はどうでござるか。とりあえず、オススメはこれでござる』

『たしかに上手い……のかな。それはひとまず置いておいて、ご丁寧にオススメ作品のURLを貼ってくれている。ここまでされると、クリックしないわけにはいかないだろ。』

「……んう、なるほどなあ……」

『作品説明だけでも、十分にエッチな雰囲気が伝わってくる。彼がオススメするだけはあるな。でも、男の娘サキュバスってなんだ。それはもう、インキュバスっていうべきなんじや。』

『つく――手が勝手に……。本能が新たな快樂を望んでいる。性欲に正直な奴め。今月はまだ何も買っていないし……ちょっとぐらいいいかな。これで、今夜のオカズは

決まつたも同然だ。

『購入してみました。読むのが楽しみです。それと、音声作品で似たジャンルのオススメはありませんか』

そんなこんなで、瞬く間に時間は過ぎていき……今は、ベッドの上で横になつている。

今日という日は、とても充実していた。半年も同じクラスだつたけれど、まつたく接する機会がなかつた咲ノ宮瑠瀬という少女。彼女と話しただけでなく友達関係まで築き、一緒に下校した。あと、誘惑も受けて。

そして、サキュの宮さんだということを、本人の口から告げられた。清楚を体現したような存在なのに、オスの情欲を惹起するものを描いていたなんて……。

エッチなイラストを描いている女の子を想像すると、どうしようもなく興奮してきて……って、そういうことを考えちやダメだ。作家先生には、男性も女性も関係ない。そう教えてもらつたばかりじゃないか。

咲ノ宮さんとの会話で思い出したが、誤字を指摘されていたんだつたな。早く訂正しないと。

『小生はそこまで音声作品にハマつてないでござるが……おしりエツチ中毒な男の娘
サキュバスがオススメでござる。あと、サキュバスではないでござるが、女の子様の
おもちゃ性活にもそういうトラックがあるから聴いてみるでござる』
お、変態がオススメを紹介してくれたぞ。ここでの変態は、軽蔑の意味ではなく、褒
め言葉だからな。

それらの作品に目を通した後、彼にお礼を言うのであった。

リアルの友達ができるも、家というかネットでの生活は変わりなくて……。
明日も、咲ノ宮さんと楽しく話せたらいいな。そう思いながら、眠りについた。